

【短報】五島列島福江島でキヒゲアリヅカムシ（ハネカクシ科アリヅカムシ亜科）を採集

野村 (2019) は、これまで未記載種 *Atenisodus* sp. として日本各地から記録してきた種の標本を精査し、台湾から知られる、キヒゲアリヅカムシ *Atenisodus gracilicornis* Raffray, 1912 であるとして、本州、九州、南西諸島（トカラ中之島、沖縄島）から記録した。九州の離島では、長崎県平戸島、鹿児島県下甕島からの記録がある。

このたび筆者は、長崎県五島列島福江島各地でアリヅカムシの採集を行い、島の南西端に位置する五



図1. 五島列島における福江島の位置と、採集地大瀬崎の位置。



図2. キヒゲアリヅカムシの採集地点（玉之浦町大瀬崎）。A：周囲の環境（歩道側の景観）；B：採集場所（歩道と反対側）。

島市玉之浦町大瀬崎から本種の多数個体を採集したので、以下に報告する。福江島および五島列島からは初めての記録となる。採集者はすべて筆者である。〈採集データ〉4♂6♀，大瀬崎，22. v. 2019；6♂4♀，同所，23. v. 2019。

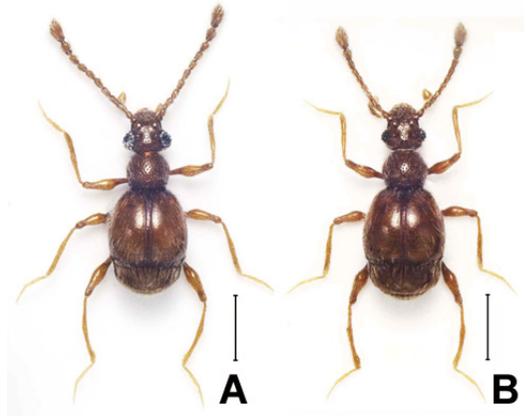


図3. 福江島で採集されたキヒゲアリヅカムシ(A:♂;B:♀) (スケール: 0.5 mm)。

引用文献

野村周平, 2019. 日本にキヒゲアリヅカムシ（ハネカクシ科、アリヅカムシ亜科）産す. さやばねニューシリーズ, (34): 44-47.

（野村周平 国立科学博物館動物研究部
(nomura@kahaku.go.jp)）

【短報】日本から記録された *Enochrus affinis* への和名の提唱（鞘翅目・ガムシ科・ヒラタガムシ亜科）

Enochrus affinis (Thunberg, 1794) は旧北区に分布する小型のヒラタガムシで、Jia & Wang (2010) がコヒラタガムシ *E. (Methyrus) vilis* (Sharp, 1884) を本種の新参シノニムとしたことで日本のファウナに加わった。筆者は Minoshima (2019) でコヒラタガムシとウスグロヒラタガムシ *E. (M.) uniformis* (Sharp, 1884) の検討を行った結果、上記2種は別種であり、日本にはコヒラタガムシと *E. affinis* の両方が生息していることが分かった。Minoshima (2019) では *E. affinis* に対して和名の提唱を行っていないため、ここで *E. affinis* に対してクロヒゲヒラタガムシ（和名新称）を提唱したい。本種は和名の通り、小顎髭の先端節と第2節の基部半分が黒色～暗色を示すことが特徴である。本研究は JSPS 科研

費 JP17K15187, JP17H02028 の助成を受けた。

引用文献

- Jia, F. L. & Y. Wang 2010. A revision of the species of *Enochrus* (Coleoptera: Hydrophilidae) from China. *Oriental Insects*, 44: 361–385.
- Minoshima, Y. N. 2019. Taxonomic status of *Enochrus vilis* (Sharp) and *E. uniformis* (Sharp) (Coleoptera, Hydrophilidae). *Insecta Matsumurana, New Series*, 75: 1–18.

(蓑島悠介 805-0071 北九州市八幡東区東田2-4-1
北九州市立自然史・歴史博物館)

【短報】父島におけるエノキコメツキダマシの記録

エノキコメツキダマシ *Dyscharachthis amplicolis* (Fleutiaux, 1923) は、これまでに北海道、四国、九州、奄美大島、台湾、シンガポールから知られているが、小笠原諸島からの記録はなかった(鈴木, 2016)。筆者らは、小笠原諸島父島で採集された個体を検する機会を得たので、ここに報告したい。

5 exs., コーヒー山, 14. VI. 2004, 大河内勇採集; 2 exs., コーヒー山, 14. VI. 2004, 大河内勇採集(ライトトラップ), 1 ex., 東平(ひがしだいら), 9–10. VI. 2004, 大河内勇採集(ライトトラップ)。(鈴木保管)。

小笠原諸島父島は、エノキコメツキダマシの記録のある本州本土や琉球列島から 1,000 km 以上も離れており、どのように本種が小笠原諸島へ渡ったのか興味を引く。コメツキダマシ科の幼虫は、基本的に潜材性であることが知られており、本種もケヤキの枯木に幼虫が入ることが明らかにされているほか、プラタナスの枯死部に幼虫が入る可能性が指摘され

ている(久松, 1985; 鈴木・田尾, 2019)。黒澤(1976)は小笠原諸島の甲虫には、枯木や朽木、とくに堅い朽木につく種類がきわめて多く、在来種の大部分は、海流によって他地域から運ばれてきたものが土着したものと述べている。このエノキコメツキダマシも幼虫が入った材が海に流出し、それが海流などによって小笠原諸島まで運ばれ、土着した可能性が高いと考えられる。

小笠原諸島に生息するコメツキダマシの分布をみてみると、イシハラクロコメツキダマシ *Euryptychus ishiharai* Hisamatsu, 1994, ミナミヒメミゾコメツキダマシ *Dromaeolus marginatus* Hisamatsu, 1965, そしてハチジヨウチャイロコメツキダマシ *Fornax hachijonis* Hisamatsu, 1963 が琉球列島にも生息するほか(久松, 1985; 鈴木, 2010, 2014, 2016, 2019), 未記載種のコメツキダマシの中にも小笠原諸島と琉球列島の両方に生息する種が複数存在する。これらのコメツキダマシについては、詳しい生態が明らかではないが、幼虫は枯木に入る可能性が非常に高く、エノキコメツキダマシ同様に琉球列島や隣接する地域から小笠原諸島まで海流によって運ばれてきたものと推測される。小笠原諸島は、陸地からかなり離れた小島にもかかわらず、生息するコメツキダマシの種数は多く、上記の他にも 10 種近くを確認している(未発表)。今後、琉球列島や台湾などの地域のコメツキダマシの調査が進めば、これらの地域を起源とする種がさらに増えるかもしれない。

報告するに当たり、貴重な標本をご提供いただいた森林総合研究所前理事の大河内勇博士に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 久松定成, 1985. コメツキダマシ科・黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之編著, 原色日本甲虫図鑑(III): 41–50 (pls. 8–9). 保育社, 大阪.
- 黒澤良彦, 1976. 小笠原諸島の甲虫相—その構成と起源—(2). 月刊むし, (69): 3–8.
- 鈴木 互, 2010. 対馬のコメツキダマシ. 甲虫ニュース, (172): 11–12.
- 鈴木 互, 2014. 韓国初記録のコメツキダマシ. さやばねニューシリーズ, (13): 44–45.
- 鈴木 互, 2016. 奄美大島で採集された興味深いコメツキダマシ 4 種. さやばねニューシリーズ, (21): 31–35.
- 鈴木 互, 2019. 石垣島におけるイシハラクロコメツキダマシの記録. さやばねニューシリーズ, (36): 75.
- 鈴木 互・田尾美野留, 2019. 街路樹のプラタナスで観察されたエノキコメツキダマシ. さやばねニューシリーズ, (34): 35.

(鈴木 互 211-0031 川崎市中原区木月大町 6-1
法政大学第二高等学校生物科)
(槇原 寛 289-0002 いすみ市日在 2033-5)



図 1–2. 小笠原諸島父島産エノキコメツキダマシ, ♂.
1, 全体図 (4 mm); 2, 雄交尾器 (1.33 mm).